羅生門　　芥川龍之介

教材のねらい

1　選定の理由

「羅生門」は、起承転結の結構が整い、古典に材を取りつつ、言葉による虚構（フィクション）の世界の展開が明確であり、人間心理の微妙な変化を読み取ることができる点で、小説の基本的な特質をつかむ目的に適した入門教材である。濃密な闇の世界は日常的な価値観とはかけ離れて妖しい魅力に溢れ、下人と老婆の関わりのドラマが緊張感を高めながら切迫した条件下での生の諸相を照らし出していく。各場面で下人の心理の揺れ動きを把握し、暗示的な結末に至るまでの筋道を追うことで、虚構の世界ならではの効果に満ちた読書体験を得ることができる。注意深く読めば、下人や老婆の主張する行動原理は決して万人が納得できるものではなく、その矛盾に生きる人物たちを作品世界に配した意味の考察が必要になる。生徒たちの「正しさ」の基準も、成長と共に変化し複雑化するだろう。作品を通じて対話と思索を促すことに適している。

また、古典籍に目を通しながら虚構世界を現在進行形で創作しつつある「作者」を顕在化させるメタフィクションの要素を含み、近代の活字文化と共に隆盛を極めた小説というジャンルが原理的にはらむ特色をわかり易く示している。

2　指導のねらい

まずは作品の舞台設定や構成（起承転結）を整理し、具体的な展開と表現に即して作中人物の揺れ動く心理を丁寧に理解していく練習をしたい。前半部分で時代背景や情景描写に筆を割いた語り手は、「作者」として作中人物との間に明確な距離を置くが、その語りの姿勢が小説全体に与える効果に注意を向けさせたい。典拠と比較した際、常識的な価値観を揺さぶる問いかけが読者に向けられている点を共有しておきたい。

(1) 具体的な表現に即して一連の状況下での心の変化を追い、善悪をめぐる基準がどのように変容していくのかを把握する。

(2) 人物や情景の描写の特徴、比喩によるイメージの喚起力などの表現効果に注意し、作品の世界観やテーマとの結びつきを考える。

(3) 作中に「作者」が登場する効果と意味について考え、小説の自由さを理解する。

(4) 下人の選んだ生き方とその後の運命について話し合い、現代に生きる私たちの価値観とかかわる問題について思いを巡らす。

3 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 常用漢字の読みに慣れ、主な常用漢字を書き、文や文章の中で使っている。〔知・技〕(1)イ
(3) 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。〔知・技〕(1)ウ
(4) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(5) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(6) 「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。〔思・判・表〕B(1)ア
(7) 「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。〔思・判・表〕B(1)イ
(8) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(9) 「読むこと」において、作品の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めている。〔思・判・表〕B(1)エ
(10) 進んで内容や展開を的確に捉えることを学び、作品の特色をつかもうとし、学習課題に沿って、舞台設定・構成・描写に対する理解を深めようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕